

令和 4 年 6 月 10 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02779

研究課題名(和文) 水書用筆を活用したICT教材及び授業開発と水書用筆を組み入れた書写指導の理論構築

研究課題名(英文) ICT teaching materials and lesson development using water brush pens, and construction of theories of penmanship instruction incorporating water brush pens.

研究代表者

樋口 咲子(Higuchi, Sakiko)

千葉大学・教育学部・教授

研究者番号：00431734

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では主に2つの成果を得た。1つは、小学校低学年国語科書写における、水書用筆を用いた運筆指導に役立つ動画教材の作成である。「水書用筆とは」「水書用筆の使い方」「水書用筆で書こう」等、11種のコンテンツを作成し、web上で公開し誰もが活用できるようにした(「水書用筆の使い方もわかる! 毛筆の書き方～ひらがな・カタカナ・漢字の基本点画」<https://www.higuchi-sakiko.com/>)。もう1つは、どの教師でも展開しやすい水書用筆を用いた書写の授業モデルの開発である(小学校教員との共同研究)。考案したモデルを基に、実際に担任の先生方に授業を行っていただき、成果を確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

水書用筆を用いた運筆指導について、指導目的・内容・方法を普及するための先導的機関や冊子もあったが、その情報をだれもが得られる状況ではなかった。また、水書用筆を使用した授業は研究会レベルで行われていたものの、扱う教材文字や授業展開が画一化する傾向にあった。また、毎時間継続して運筆指導を行う発想にならなかった。

本研究は、どの教師でも水書用筆を使用して継続的に運筆指導を行うことができる授業モデルを開発し成果を検証できた点に意義がある。

研究成果の概要(英文)：Two results were obtained in this study. One is the creation of video teaching materials that are useful for teaching brush strokes using water brush pens in the lower grades of elementary school Japanese language penmanship. We created videos on 11 topics such as "What is a water brush pen?", "How to use a water brush pen", and "Let's write with a water brush pen" and published them online so that anyone can use them. You can also learn how to use a brush for water writing! You can learn how to write brush-basic dot drawings of hiragana, katakana, and kanji "<https://www.higuchi-sakiko.com/>". The other is the development of a penmanship lesson model using a water brush pen that is easy for any teacher to teach (joint research with elementary school teachers). Based on the model we devised, we asked the teachers in charge to use this in their lessons and confirmed the results.

研究分野：書写書道教育

キーワード：水書用筆 運筆指導 運筆動画教材 低学年の書写指導 書写授業開発

1. 研究開始当初の背景

平成 29 年 3 月告示の小学校学習指導要領解説国語編の「指導計画の作成と内容の取り扱い(エ)」に、低学年において「適切に運筆する能力の向上につながるよう、指導を工夫すること」とあり、そのための学習用具として、「水書用筆」が例示された。水書用筆はこれまで書写指導において使用されたことはなく、令和 2 年度の実施に向けて研修会や研究授業が一部で開始されていた。

研修会の中心となったのは、書写・書道教育推進協議会の水書用筆等を活用した書写指導法検討委員会で、水書用筆等の筆記具の理解と実践が適切に行われるように、全国で会場を設けて研修会を実施していた。統一した見解のもとで行われるよう、テキストや動画教材も作成していた。

また、いち早く研究授業を行っていたのは、東京都小学校書写研究会で、水書用筆を用いた低学年の書写授業を公開し、先導的役割を果たしていた。

その他一部の小学校では、令和 2 年度の実施に向けて研究的実践が行われていたものの、ほとんどの現場では、水書用筆を使用した書写授業の展開に関して、指導目的や理念の理解、用具の選定や扱い、そして実技指導に不安の声があがっていた。

2. 研究の目的

前述した状況にあって、以下の 5 点を目的とする研究が必要であると考えた。

書写を専門としない教師による授業実践のしやすさを踏まえながら水書用筆を使用した授業を考案する。

軟筆(水書用筆や小筆)と硬筆との関連指導や指導体系を視野に入れた授業を考案する。

水書用筆を使用した運筆指導で教材として用いられることの多い片仮名教材作成の一環として、ICTを活用した自宅学習や自主学習に対応できる硬筆指導モデルを考案する。

水書用筆等の筆記具への理解を深め、示範に自信がもてない教師でも活用できる動画教材を作成し、WEB上で公開して、誰でも活用できるようにする。

字形と運筆という書写指導の内容自体について歴史的考察を行う。

3. 研究の方法

上記 2 の ~ については、以下の方法で研究を進めた。

公立小学校で書写教育を研究している教員や、千葉大学教育学部附属小学校で書写指導にあたっている教員とそれぞれ授業を考案し、その授業を、公立小学校や附属小学校の書写を専門としない先生方に実践していただき、授業の検証を行った。

上記 2 の ~ については、先の 2 名の書写を専門とする先生方と動画教材を作成し、授業で成果を上げていた。そうした効果が見込まれる動画教材を参考に、さらに改良を加え、先の 2 名の先生方にアドバイスいただきながら、WEB上で公開するための動画を作成した。

上記 2 の ~ については、水書用筆を使用する指導が導入された背景の一つに、字形指導に加え運筆指導も重視すべきであるという考え方がある。今日の字形と運筆の指導内容について、近代教育が始まってから、どのような変遷を経て今日の指導内容になったのかを見ていく中で、今日の指導内容を見直す検討材料や視点を見出すことができると考え、明治期から昭和戦前期までの書写の教授法書を調査・分析し、考察を行った。

4. 研究成果

上記 2 の ~ について、それぞれ以下の研究成果を得た。

公立小学校で書写教育を研究している嶋野真里教諭(令和 3 年度千葉県長期研修生)とともに、小学校低学年の水書用筆を使用した硬筆書写指導において、どの教師でも展開しやすい授業モデルの開発をおこなった。授業の特徴は、毎時の学習指導過程を同じにすることにより、書写を専門としない教師でも安心して展開できるようにしたこと、示範に自信のない教師でも運筆指導ができるよう、動画教材を用意したこと、水書用筆は毎時間必ず使用するとともに、授業の初めに水書用筆で運筆のウォーミングアップを取り入れたことである。学習指導案・板書計画・教材・プリント・動画等は全て用意し、初回の授業前に嶋野教諭が模擬授業を行い、授業の流れを説明した。5名の教師に担任しているクラスで授業を行っていたところ、意識調査とインタビューから、展開しやすい授業モデルであること、そしてこれからそれぞれの教師が与えられた指導案から一歩進んで、工夫する段階を目指していることがわかった。また、児童の運筆能力の向上も確認でき、授業モデルの成果が認められた。研究成果は、全国大学書写書道教育学会で発表し、「水書用筆を使用した低学年の書写の授業実践報告 教師の指導力向上の成果」のタイトルで『書写書道教育研究』36号(2022 全国大学書写書道教育学会編)に査読を経て掲載された。

千葉大学教育学部附属小学校で書写指導にあたっている芹澤麻美子非常勤講師と時田裕教諭・宮本美弥子教諭とともに、軟筆(水書用筆や小筆)を用いて児童が適切に運筆する能力の向上を目指した授業研究を行った。硬筆のみで行う小学校低学年の書写では、「とめ・はね・はらい」という毛筆の運筆に基づいた硬筆の運筆を理解させることは難しいが、水書

用筆は鉛筆と同じ持ち方で水をつけて書くため用具の扱いが簡便でありながら、毛筆と同じ軟筆指導の効果が期待できる。すでに全国の小学校で先導的実践が行われその成果が報告されており、鉛筆の持ち方が改善される点と、「とめ・はね・はらい」といった運筆への理解と技能の高まりの2点において低学年において実践する水書用筆の効果が認められている。書字活動において終始力を込めて書く書き方は疲労を招き学習活動を阻害する。筆圧の緩急をもたせた楽な運筆は、長時間の書字活動を可能にするため、運筆指導は重要な意味をもつ。本研究では、軟筆を使用した2単位時間の授業を、低学年のみならず中学年（3年：水書用筆）高学年（5年：小筆）でも行い、運筆能力の実態調査と授業の検証を行った。その結果、小学校1・3・5年生において、学年が上がるにつれて、点画を適切に書くことができるようになるという実態を数値で示すことができた。また、軟筆を使用して練習することにより、筆圧が安定して適切に運筆できるようになることも明らかとなった。さらに、軟筆（水書用筆や小筆）と硬筆との関連指導や指導体系についても言及した。研究成果は、「小学校国語科書写における軟筆（水書用筆・小筆）指導に関する研究 適切に運筆する能力の向上を目指して」のタイトルで『研究紀要』第25集（2020 日本教育大学協会全国書道教育部門）に掲載した。

千葉大教育学部附属小学校で書写指導にあっている芹澤麻美子非常勤講師と時田裕教諭・宮本美弥子教諭とともに、小学校低学年における効果的な片仮名指導について研究した。小学校低学年の片仮名指導では、学習者の片仮名習得状況にばらつきがあることや、実践研究の少なさが指摘されている。平仮名と片仮名との初期学習の実情に注目すると、平仮名学習は児童の学習入門期にあたるため、国語の学習内容自体が少なく、文字指導に当てる時間が多く取れる。一方、片仮名を学習する時期の国語教材は、教材文の読解などで時間が取られてしまい、片仮名指導に十分な時間が取れない。さらに、日頃使用する場面が少ないため、忘れてしまう片仮名もあり、書字活動に支障をきたす場面も見られる。そこで本研究では、低学年児童の片仮名書字の実態を捉えたのち、片仮名の習得や習熟のために、マイクロソフト社のTeamsを活用して自宅での学習時間を確保し、効果的に学習させる教材と学習方法を考案することとした。学習方法を授業で学び、Teamsにアップした動画教材とドリルによって主体的に自宅学習に取り組む姿勢を身に付けさせることもねらいとした。その結果、1・2年生ともに片仮名の習得率を上げることができた。研究成果は、「小学校低学年のカタカナ書字の実態と教材開発 Teamsを活用した動画付きドリル学習の成果」のタイトルで『研究紀要』第26集（2021 日本教育大学協会全国書道教育部門）に掲載した。

小学校低学年の国語科書写における水書用筆を用いた運筆指導を行うための動画教材を作成し、WEB上で公開し、誰もが活用できるようにした（「水書用筆の使い方もわかる！毛筆の書き方～ひらがな・カタカナ・漢字の基本点画」<https://www.higuchi-sakiko.com/>）。本研究で作成したコンテンツは、「カタカナ五十音」（毛筆大字）「似ているカタカナ」「カタカナや漢字を書くときに注意すること」「水書用筆とは」「水書用筆の使い方」「水書用筆で書こう」「点画の書き方～指・水書用筆・鉛筆～」「まちがえやすいカタカナ（水書用筆・鉛筆）」「漢数字（水書用筆・鉛筆）」「つながりを意識して書くひらがな（水書用筆・鉛筆）」「方向に気をつけるカタカナ（水書用筆）」である。

明治期から昭和戦前期までの習字・書き方の教授法書を調査・分析したところ、字形指導については、江戸期に中国から伝わった間架結構法等について述べた八十四法と九十二法から、小学生に必要なと思われるものを指導していたことが確認できた。内容は教授法書ごとに異なる。また、部首ごとの形の整え方に頁が多く割かれていた。今日指導していない結構法として、「対位法」があったこともわかった。研究成果は、「小学校で指導する楷書字形の原則とその分類構造の変遷 - 明治期から昭和戦前期の間架結構法を中心に -」のタイトルで『書写書道教育研究』35号（2021 全国大学書写書道教育学会）に査読を経て掲載された。

一方、運筆指導については、江戸期に中国から伝わった筆法の永字八法とその変法である二十四法と七十二法が教師が心得ておくべき点画とされていたが、明治末期に「基本点画の選定」という考えが強く意識されるようになり、点画数は教授法書によって一定しないものの、今日基本点画として挙げられている点画が選定される方向に向かっていくことを明らかにした。また、名称は永字八法の名称が社会で通用していたため、児童が親しみを持てる平易な名称が提示されても追従されることはなかった。そのため難解な名称はそのまま使用されたり、名称を教えないまま筆法教授を行ったりしていたことも確認した。これらの動向の背景には、児童の発達や教材研究の重視、実用主義に基づく学習内容の平明さの必要性の高まりという実情があった。研究成果は、「小学校で指導する楷書の毛筆基本点画と運筆法の変遷 - 明治期から昭和戦前期を中心とした永字八法からの展開 -」のタイトルで『書写書道教育研究』36号（2022 全国大学書写書道教育学会）に査読を経て掲載された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 芹澤麻美子、時田 裕、宮本美弥子、樋口咲子	4. 巻 25
2. 論文標題 小学校国語科書写における軟筆（水書用筆・小筆）指導に関する研究 - 適切に運筆する能力の向上を目指して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育大学協会全国書道教育部門研究紀要	6. 最初と最後の頁 14-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 芹澤麻美子、樋口咲子	4. 巻 26
2. 論文標題 小学校低学年の片仮名書字の実態と教材開発 - Teamsを活用した動画付きドリル学習の成果 -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育大学協会書道教育部門研究紀要	6. 最初と最後の頁 10-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 樋口咲子	4. 巻 36
2. 論文標題 小学校で指導する楷書字形の原則とその分類構造の変遷 明治期から昭和戦前期の間架結構法を中心に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 書写書道教育研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 嶋野真理、樋口咲子	4. 巻 36
2. 論文標題 水書用筆を使用した低学年の書写の授業実践報告 教師の指導力向上の成果	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 書写書道教育研究	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 樋口咲子	4. 巻 36
2. 論文標題 小学校で指導する楷書の毛筆基本点画と運筆法の変遷 - 明治期から昭和戦前期を中心とした永字八法からの展開 -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 書写書道教育研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 樋口咲子
2. 発表標題 小学校で指導する楷書字形の原則とその分類構造の変遷 明治期から昭和戦前期の間架結構法を中心に
3. 学会等名 全国大学書写書道教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 樋口咲子
2. 発表標題 小学校で指導する毛筆基本点画と運筆法の変遷
3. 学会等名 全国大学書写書道教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 嶋野真理、樋口咲子
2. 発表標題 どの教師でも展開しやすく、児童の理解・深化の過程を明らかにした授業モデルの開発 低学年における硬筆書写の能力向上へつなげるために
3. 学会等名 全国大学書写書道教育学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

小学校低学年の国語科書写における水書用筆を用いた運筆指導を行うための動画教材を作成し、WEB上で公開し、誰もが活用できるようにした（「水書用筆の使い方」もわかる！毛筆の書き方～ひらがな・カタカナ・漢字の基本点画」<https://www.higuchi-sakiko.com/>）。

本研究で作成したコンテンツは、「カタカナ五十音」（毛筆大字）「似ているカタカナ」「カタカナや漢字を書くときに注意すること」「水書用筆とは」「水書用筆の使い方」「水書用筆で書こう」「点画の書き方～指・水書用筆・鉛筆～」「まちがえやすいカタカナ（水書用筆・鉛筆）」「漢数字（水書用筆・鉛筆）」「つながりを意識して書くひらがな（水書用筆・鉛筆）」「方向に気をつけるカタカナ（水書用筆）」である。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	嶋野 真里 (SHIMANO Mari)		
研究協力者	芹澤 麻美子 (SERIZAWA Mamiko)		
研究協力者	時田 裕 (TOKITA Yutaka)		
研究協力者	宮本 美弥子 (MIYAMOTO Miyako)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------